

第2章 コロナ禍の学生生活満足度

本章の概要

本章では、一部の項目を除いて同一の内容で実施した2019・2020年度のデータを用いて、コロナ前・コロナ中の学生の回答傾向の違いについて検討した。検討の結果、コロナ禍の2020年度においては、授業に関する学生同士の議論や部・サークル活動などの課外活動への意欲の回答値が低く、特に学生間のコミュニケーションが取れていなかったことがうかがえた。この点は大学生活に関する満足度が全般的に低下したことに関連していると考えられた。一方で、授業の受け方の工夫や専門知識の学修実感などコロナ前と大きな違いが見られないものも多く、全面的な遠隔授業に対応しながら学びを進めていたことがうかがえる。2021年度は、制限はあるものの一定数対面授業が実施され、課外活動も可能な状態になった。今後は、学生の学びへの効果をもとめ、学生同士が以前と同じ水準でコミュニケーションを取りながら学びあえることに配慮しながら、対面と遠隔の授業方法を組み合わせることや、課外活動等を行えるような環境を取り戻していくことが必要である。

1. 分析の目的

在学生調査は、学生一人一人が毎年度の活動や成長を振り返る機会を提供することを主たる目的としているが、大学にとっては、教育の内部質保証サイクルを機能させる議論のための貴重なデータを得られる機会でもある。本調査の分析に当たっては、各年度で異なるテーマを設けて行ってきた。平成29(2017)年度実施分では、様々な活動への取り組み意欲と学び方や学修実感の違いがあるかを検討し、取り組み意欲の4つのパターンのうち様々な分野に意欲的な学生の学修実感が高いことを示した。平成30年(2018)年度実施分では、期間 GPA の高低と学び方や意欲、専門知識の学修実感の関連性について検討し、GPA 上位群は自らしっかりと学び方をしていると自負していることなどがうかがえた。令和元(2019)年度実施分では、キャリア関連の設問と本学の就職動向を合わせて分析し、大学生活での学びと仕事の関わりは2・3年生が希望する程度より進路が決定した4年生にとっては薄いものとなっていることと、その要因として本学でも情報通信業への就職者数が増加する傾向にある点などを考察した。

令和2(2020)年度は、在学生調査の各質問項目の回答結果から、コロナ前・コロナ中の学生の学び方・学修実感・満足度・意欲の年度間の違いについて検討する。

また、同年は、新型コロナウイルス感染症対策のため、遠隔授業の方式による授業運営となった。遠隔授業形式になり、学生同士や学生と教員間の直接的なコミュニケーションが失われてしまったほか、課題が多すぎる等の問題が発生するなど、学生生活の満足度は全国的に低下していることが推察される。なお、本学の在学生調査は、利用が制限された食堂や体育館などの一部の施設に関する項目を除いて、令和元・2年度とも同一の内容で実施した。

2. 分析の方法

本章においては、調査年度をグループとして、学年別に年度間の回答平均値の違いを検討する。方法としては項目ごとに年度を要因とする分散分析（Welch の方法による）を行って、5%水準で有意であった場合に年度間の回答平均値に違いがあると判断した。なお、回答の選択肢として「0.判断できるほど体験しなかった」や「0.経験しなかった」という回答値が0となるものがあるが、本章の分析においては平均値の計算から除外している。したがって、満足度や意欲の平均値はそれぞれの項目の内容を経験したと感じている学生の平均値である。

3-1.1年間の学び方

本調査のQ1では、1年間の学び方について10項目に分け、1.全く当てはまらない～4.とてもあてはまるの4件法で訊ねている。これらの項目で、調査年度による回答傾向の違いを検討した。

図 2-3-1 学び方に関する項目の調査年度別の回答平均値

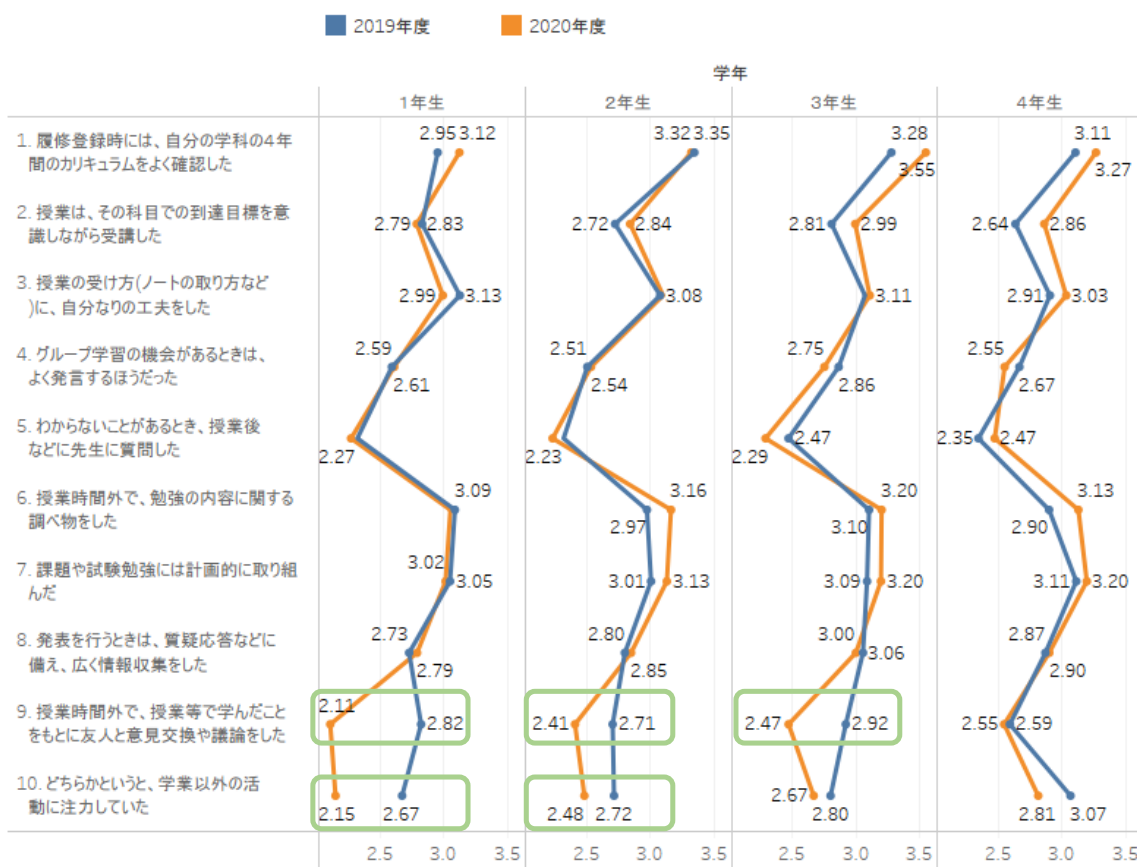


図 2-3-1 では、年度間で平均値の差が検出された箇所を四角で囲っている。9.「授業時間外で、授業等で学んだことをもとに友人と意見交換や議論をした」では1年生・2年生・3年生で、10.「どちらかというと、学業以外の活動に注力していた」では1年生・2年生で差が見られ、いずれも2020年度の平均値が低い結果であった。この他には年度間の違いは見られなかった。

このように、コロナ禍の影響を受けた項目は友人との議論や学業以外の活動への注力であり、学生間のコミュニケーションや課外活動などが阻害されてしまったことがわかる。また、4年生では年度間の違いが見られなかったことから、本調査で訊ねている学び方について、4年生は影響がなかったことがうかがえる。これは、後期に一部の科目で対面授業が再開された際に、専門演習や卒業論文などが対面授業の対象となりやすかったことに加えて、4年生は既に友人関係を構築できていることも要因として考えられる。

3-2. 知識・能力の身についた実感

本調査の Q2 では、知識・能力の身についた実感について 17 項目に分け、1.全く身につかなかった～5.しっかり身についた の 5 件法で訊ねている。これらの各項目で、調査年度による回答傾向の違いを検討した。

図 2-3-2 知識・能力の学修実感項目への回答平均値

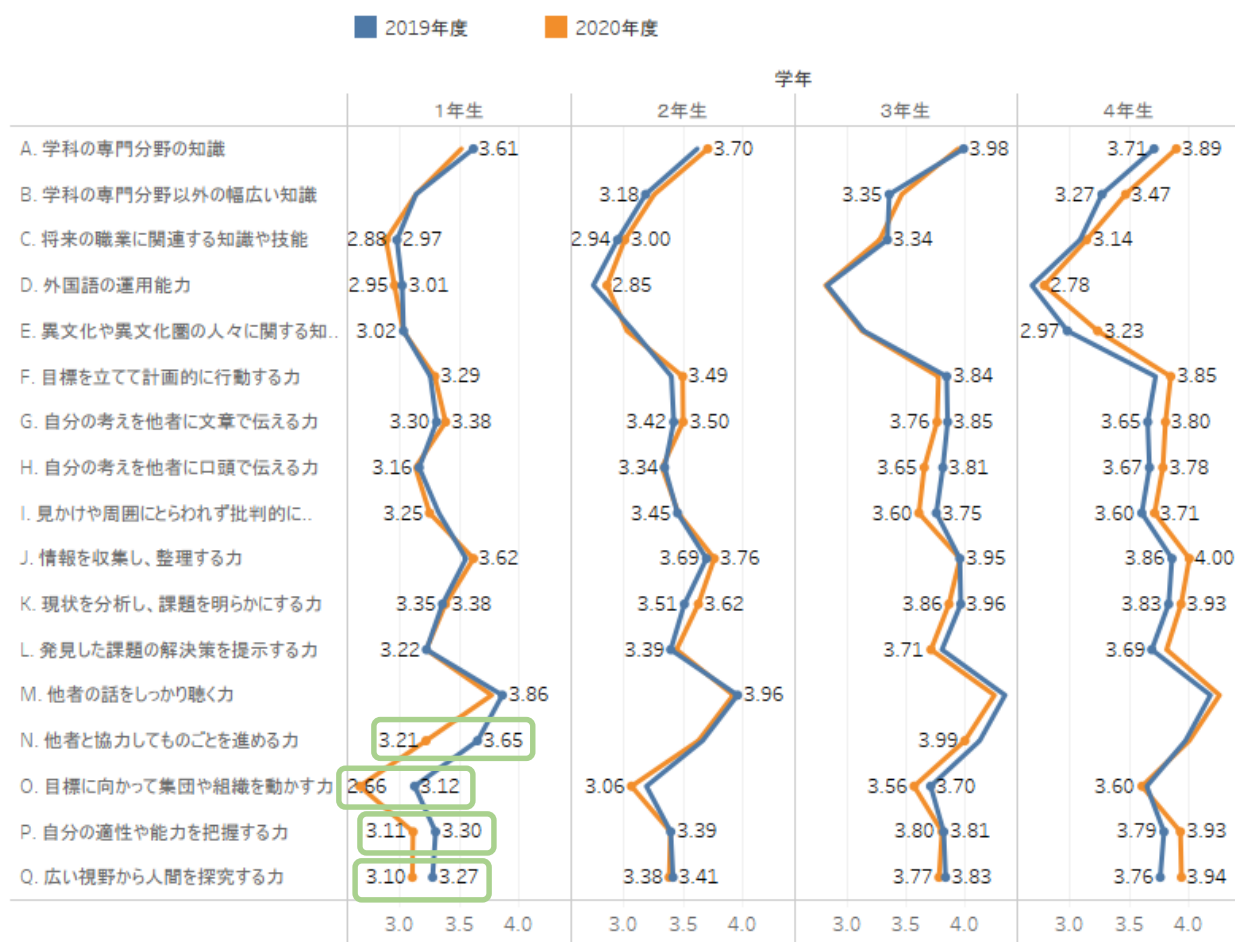


図 2-3-2 では、年度間で平均値の差が検出された箇所を四角で囲っている。2～4 年生においては、全ての項目で年度間の差は検出されなかった。1 年生でも、多くの項目で年度間の差がなかったが、N.「他者と協力してものごとを進める力」、O.「目標に向かって集団や組織を動かす力」、P.「自分の適性や能力を把握する力」、Q.「広い視野から人間を探究する力」については、2020 年度の平均値が低い結果であった。

1 年生で 2020 年度の平均値が低かった項目は、いずれも身につけるために他者とのコミュニケーションが必要になると思われるものであり、全面的に遠隔授業になり他者とのコミュニケーションが不足していたことがうかがえる。2 年生以上では学修実感に違いが見られなかった要因としては、2 年生以上は既に人間関係や大学生活の基盤を構築できていたことが、他者とのコミュニケーションとの関連の深い能力の学修実感での年度間の違いがなかった要因であると考えられる。

3-3. 大学生活への満足感

本調査の Q3 では、1 年間の大学生活への満足度について 10 項目に分け、0.判断できるほど体験しなかった、1.全く満足していない～4.とても満足している、の 5 件法で訊ねている。これらの各項目で、調査年度による回答傾向の違いを検討した。

図 2-3-3 大学生活への満足度項目への回答平均値

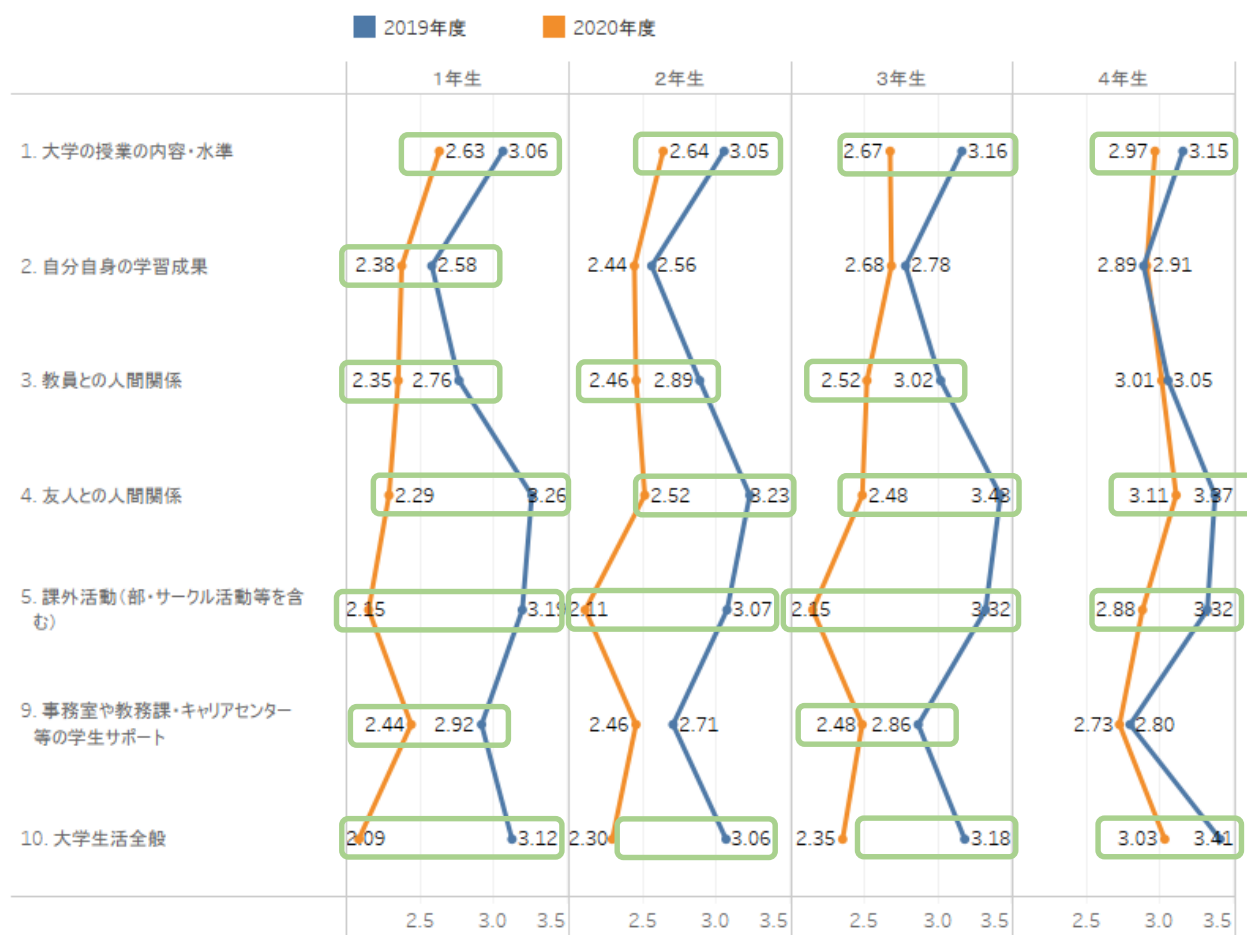


図 2-3-3 では、年度間で平均値の差が検出された箇所を四角で囲っている。1.「大学の授業の内容・水準」、4.「友人との人間関係」、5.「課外活動（部・サークル活動等を含む）」、10.「大学生活全般」では、全ての学年で 2020 年度の平均値が低い結果であった。また、2.「自分自身の学習成果」では 1 年生のみ、3.「教員との人間関係」では 4 年生以外、9.「事務室や教務課・キャリアセンター等の学生サポート」では、1・3 年生で 2020 年度の平均値が低い結果であった。

このように多くの項目で 2020 年度の満足度は低く、対面授業や課外活動が制限されたことによってコミュニケーションをとる機会が減り、学生間・学生－教員間の人間関係も満足に結べていなかったことがうかがえる。

3-4. 各種活動への取り組み意欲

本調査の Q4 では、各種の授業科目や学習、課外活動等への意欲について 15 項目に分け、0.経験しなかった、1.全く意欲的でなかった～4.とても意欲的だった、の 5 件法で尋ねている。これらの各項目で、調査年度による回答傾向の違いを検討した。

図 2-3-4 大学生生活への満足度項目への回答平均値

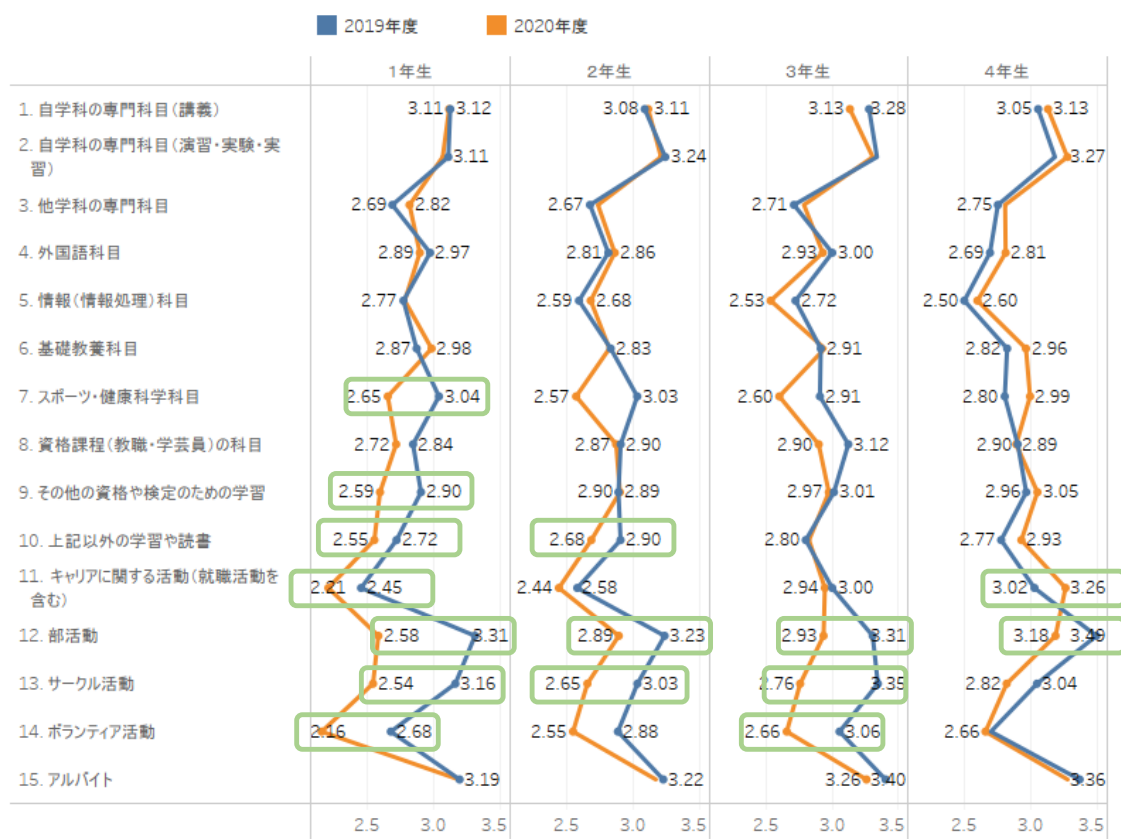


図 2-3-4 では、0 以外の回答で算出した平均値について、年度間で差が検出された箇所を四角で囲っている。0 の回答を除外しているため、図の平均値は全て経験したとじている学生の意欲の平均値である。これを見ると、12.「部活動」は全ての学年で 2020 年度の意欲が低かったことがわかる。またサークル活動も 1～3 年生で低く、特に課外活動に対する意欲が削がれてしまったことがうかがえる。いずれの学年もアルバイトに関しては年度間の差が見られなかったため、他の課外活動に比べて意欲が削がれてはいなかったようである。大学での活動が制限されたことからの、学生の諸活動への意欲の影響が見て取れる。

自学科の専門科目や外国語・情報処理・基礎教養科目などに対する意欲の平均値には差が見られなかった。したがって、コロナ禍での遠隔化した授業に対しても、学生はこれまでと変わらぬ意欲をもって取り組んでいたと言えよう。ただし、スポーツ・健康科学科目については、2020 年度の特に 1 年生で平均値が低い結果であり、この科目が遠隔化することによる学生の意欲への影響はやはり大きかったことがわかる。

3-5.まとめ

以上、各質問について検討してきた年度間の違いについてまとめる。まず、1年間の学び方には多くの項目で年度間の違いは見られなかったが、友人との議論や意見交換、学業以外の活動への注力は2020年度の方がし難い状況にあったことがうかがえた。知識・能力の学修実感についても、多くの項目で年度間の違いは見られなかったが、1年生で、身につけるために他者とのコミュニケーションが欠かせない能力において、2020年度の方が低い傾向にあった。大学生生活の満足度については、多くの項目で2020年度の方が低い傾向にあった。また、部活動やサークル活動への取り組み意欲について、経験したとじている学生に限っても2020年度の方が低い傾向にあったが、専門科目などの授業科目については、大きな違いはみられなかった。

これらのことを踏まえると、授業での学び方や意欲、学修実感などは学習の課程で学生間のコミュニケーションが重要になるものを除けば、遠隔授業の状況下においても学生はコロナ前と同様に学んでいたことがうかがえる。コロナ禍においては、部活動やサークル活動、授業に関する学生同士の議論に代表されるように、学生同士のコミュニケーションが特に阻害されてしまっており、そのことによって大学生生活に関する満足度が全般的に低下してしまっただことがうかがえる。また、このことは、学内での人間関係を構築できていなかった1年生に顕著に現れていた。

2021年度は、制限はあるものの一定数対面授業は復活し、課外活動も可能な状態になった。今後は、学生の学びへの効果を高めることを目指し、学生同士が以前と同じ水準でコミュニケーションを取りながら学びあえることに配慮しながら、対面と遠隔の授業方法を組み合わせることや、課外活動等を行えるような環境を取り戻していくことが必要である。